

## F・シュレーゲルの初期思想における「伝達」

山口沙絵子 (東京大学)

---

ドイツ初期ロマン派の理論的旗手 F・シュレーゲル (1772-1829) の思想は、長らく専ら文学の領域において研究されてきたが、これを当時の哲学的文脈の中で捉え直す動きが 90 年代からドイツはもとより英語圏においても進行中である。本発表は、こうした哲学史的再検討という観点から、彼の初期思想 (1797-1801) における「伝達」(Mitteilung) の概念に着目する。現代では人に何かを「知らせる」という意味で主に使われる「伝達する」(mitteilen) という動詞には、今日では稀だが古くは中心的であった語法として「分け与える」という意味がある。『哲学概念史事典』によれば、「伝達」概念に初めて哲学的意味を与えたカントにおいても、そこには未だラテン語の *communicatio* 概念に含まれる「mitteilen されるものが Mitteilung を通じて共通のものとなる」という神学的意味の残響があった。「伝達」という行為は、「伝達」されるものを介した他者との関係構築に、ひいてはシュレーゲルの哲学的評価に際しても重要な「共同性」の問題に係る、と言える。

本発表ではこうした「伝達」概念が有すると思われる諸側面の中でも、とりわけ文字を通じて書き手から読み手へと何らかの意味で思想が伝えられる、という具体的場面に注目する。これを語る上で度々足掛かりとされてきたのが、少数者にのみ伝えられる「秘教」(Esoterik) と、一般に広く伝えられる「公教」(Exoterik) の対概念である。その基本的な軸は「伝達」の受取り手の範囲の大小にあるが、これは同時に何が、何のために、いかに伝達されるのかという問題と不可分の関係にある。過去のシュレーゲル研究においては、彼の思想の内にこれら相反する両極への傾向が指摘される一方、畢竟彼の「公教」的方向は失敗し結果的に「秘教」に陥ってしまった、と結論される場合が殆どであった。これに対し本発表が目指すのは、「伝達」をめぐるシュレーゲルの初期思想における「秘教」と「公教」の—少なくとも彼の自己理解の上での—調停可能性の提示である。

そのため本発表では、これら二つの傾向について論じる際に先行研究で夫々その拠り所とされてきた「理解(不)可能性」(die (Un-)verständlichkeit) 及び「通俗性」(Popularität) の概念を、18 世紀末の哲学的議論と関連づけながら検討する。具体的には、当時特に万人に理解可能な哲学を唱道した所謂「通俗哲学」の思想潮流と、そこで非難されたカント派(カント、フィヒテ等)における「伝達」論に焦点を当てる。こうしたアプローチは、シュレーゲルにおける「伝達」の「秘教」性を強調する多くの先行研究が 20 世紀的な理論を 18 世紀末に投影しているという事情を鑑み、その妥当性を見直しを意図したものである。結論としては、彼の初期思想における「伝達」が、パラドックスやイロニーを伴う表現形式により先ずは少数にしか理解されない「秘教」的なものとなるが、歴史哲学的には真の人間の「知性」を促進し万人へと向けられた「公教」的なものと位置づけられ得ることを示す。